

<読書感想文～話の広げ方・万能の切り口の例～>

■「家族の言葉」や「この本の内容を〇〇に話してみると、父は・・・」を加え、そこから話を広げる

例) 私の父はよく「本の価値は本の内容以上に、何かのきっかけを与えてくれるところにある」と言っているのだが、確かに私はこの本に刺激され、その仕事の内容を詳しく調べるきっかけになった。そのため本書は、父の基準でいう「価値の高い本」だったといえるだろう。(122字)

■「過去は変えられないが未来は変えられる、という発見が得られた」・・・という切り口を利用する

例) 人間は過去を変えることはできない。しかし「心がけ」と「努力を続けること」によって「未来はいくらでも変えられる」という事実を、私は本書を読み再認識することができた。

さらに、未来の特定の時期から現在を眺めれば、現在は過去になる。そうであるなら「過去はこれから作れる」という大発見をすることもできたのだ。つまり、未来の特定の時期までに成功したいのであれば、それまでに「そうなるに値する過去」を「これから作ればいい」という大発見を得たのだ。

「その時期にそうなるに値する過去をこれから作ればいい!」・・・なんという希望に満ちた発見だろう。私は本書を読み、これからの人生を変える「鍵」のような言葉を手に入れることができたのだ。これからは「そうなるに値する過去をこれから作る」という意識で日々の生活を真剣に生きたいと思う。そのような意識改革のきっかけをくれた、私にとっての記念碑的な読書経験であった。(394字)

■「〇〇には人を(人生を)変える力があることを発見できた」・・・という切り口を利用する

例) 主人公と〇〇の、この些細な会話の部分を読んだ際、私は偶然「言葉には人を変える力がある」という大きな発見を得た。また、それと同時に恐怖も感じるようになった。

主人公が〇〇から発せられた、この何気ない一言が原因で、転落の一途をたどったように、自分が過去に放った軽率な言葉が、実は誰かの人生を大きく変えてしまっていたのではないかと。

あるいは、過去に自分に向けられた言葉の中にも、本来なら私の人生のターニングポイントになるような「重大なアドバイス」があったのではないかと。

「言葉には人を変える力がある」・・・おお、なんと重く、それでいてその重さを意識しにくい事実であろうか。もし私が、この年のこの時期にこの本に出合えていなかったなら、さらに私は何年もこの重く尊い事実気づくことができなかつたかもしれない。これからの私は自分が発する言葉に、また自分が耳にする言葉にもっと注意深くしなければならぬと反省させられた。(401字)

■小説の場合「情報との付き合い方」について発見したことを述べる

例) 私は趣味で、よく音楽を聴くのだが、この物語を読み、ふと音楽と物語の共通点を発見してしまった。それは、音楽も物語も共に「特定の感情を作るための創作物である」と点だ。

効果的に感情を作り出すためには、順序だて(並べ方や構成)が重要という点も共通している。音楽は「音の配列」、物語は「情報の提供順序」である。そのため音楽や物語は、しばしば悪徳宗教団体などが「マインドコントロール」のために悪用したりもする。

私はこの作品を読み、これからは、音楽や物語に触れて「感動した」という場合も、純粋に「感動した」と喜ぶだけでなく「感動させられた」という捉え方もしなければならぬと痛感させられたのだ。作品という「曲」や「物語」によって意図的に「心をコントロールされた状態」だからだ。

本書を読み私は確かに感動した。しかしそれは、この作品によって著者に「感動させられた」という側面もあるのだ。これからは、作品によって「心をコントロールされない自分」を作るトレーニングを兼ねた読書をするようにしたい。そのような考えを与えてくれた読書経験であった。(472字)

■「学ぶことの大切さ」「伝え残すことの大切さ」を発見できた喜びを伝える

例1) 我々人間は、起きている間は、常に何かを「思っている」ものだが、その思いは「活字として書き残し発表すること」をしなければ社会全体の情報資源にはならないものだ。

私は本書を通じ、著者の主張する〇〇する際の心構えや、〇〇に必要な知恵などをたくさん知ることができたのだが、その点以上に、むしろ「先人達の残した情報を知ることの価値」や「有意義な情報を伝え残すことの価値」に気づけたことの方に嬉しさを感じてしまった。私にとって、この二つの発見が得られたことは、とても費用対効果の高い読書経験だったといえる。(248字)

例2) 私は本書から、著者が本来的にこの作品によって伝えようとしていたであろう、現代社会の〇〇の問題点や、〇〇を大切にすべきとの内容以上に「情報を伝え残すことの価値」を発見できたことが大きな収穫であった。それは、人が何らかの「判断」をするためには「判断材料」が必要だが、その判断材料を自己の経験だけに頼っている材料が少なすぎると痛感させられたからだ。

それに伴い、個人の経験を補ってくれるものが「本」であり、ゆえに「読書」が大切なのだと本書は私に気づかせてくれた。そのため、これからは判断材料の分母を増やす意味での読書をもっと多くしなければならないと考えさせられた。また読書により情報を大量にインプットするほか、SNSなどを通じ、みずからも情報を積極的に伝え残すようにすべきだとも思うようになった。私にこのような「意識変革のきっかけ」を与えてくれた本書の著者には、最大限の敬意と感謝の気持ちをささげたい。(398字)

■タイトルやサブタイトルについて考える

「なぜ、この本のタイトルは〇〇ではなく、〇〇なのか？ おそらく著者は・・・」

「もし、私がこの本にタイトルをつけるのであれば『〇〇〇〇〇〇』としたでしょう。なぜなら・・・」

「もし、私がこの本にサブタイトルを加えるのであれば、〇〇〇〇〇〇の一文を使ったでしょう。なぜなら・・・」

■「この本のメッセージを〇〇で表すなら」・・・から話を広げる

「この本のメッセージを昔の人の名言で表すなら、それは〇〇の名言「〇〇〇〇〇〇〇〇」そのものだと思う。

「この本で学んだ内容を格言で表すなら、〇〇の言った「〇〇〇〇〇〇〇〇」と言っていいたいだろう。

「この物語で著者が伝えようとしたことは、ことわざの「〇〇〇〇〇〇〇〇」そのものではないかと思う。

■登場人物などの「設定」に注目し「著者がなぜそのような設定にしたのか」を推論し考えを述べる

例) 物語の中に「祖父の臨終の場面」や「病気の妹」が登場していたが、著者はおそらく「人生には限りがあること」や「健康でいられる時間の尊さ」「時間の大切さ」を間接的に伝えるために、そのような設定にしたのではないかと思う・・・など。

<その他>

■「もし、この本に続きがあるなら・・・」を加える

■「この本を読んだ翌朝、わたしは次のような夢を見た。それは・・・」を加える

■この本を書いた著者について多くを語る

■内容に対する、読む前の予想と実際とのギャップを述べる

■この本で発見した「教訓」や「疑問」を中心にした内容にする

■今の自分にできる「具体的」で「現実的」なアクションを考えそれを中心に感想文を書く

■対比を利用して話を広げる